

第四回 『赤と黒』－上昇と下降の物語 下川 茂 (1991. 4. 7於楽友会館)

スタンダードの『赤と黒』は、平民の主人公の出世と破綻の物語であり、主人公の刑死によって終わるが、プルーストを初めとする多くの論者によって、高い場所が主人公の魂の高揚と密接に結びついていることはすでに指摘されている。ところで、このように、作品の大枠として、主人公の上昇－下降をテーマとしてもつ『赤と黒』は、作品の細部においても、様々な形において上昇と下降のテーマを含んでいる。また主人公以外の登場人物、さらには事物も上昇－下降する。様々な局面で上昇と下降が反復されることが、『赤と黒』の作品構造上の一つの大きな特徴となっていると考えられる。

作品全体にわたる大きな上昇－下降で最も目につきやすいのは、もちろん、主人公の出世にかかわる職業・身分・収入のそれであるが、主人公の知識も全体にわたって上昇－下降する。さらに、主人公の恋人も、田舎貴族の夫人からパリの大貴族の令嬢へ（上昇）、そしてもとの田舎貴族の夫人へと（下降）変化する。

細部に目を移すと、まず、主人公が頻繁に場所の上下移動をすることに気がつく。主人公の居室が多くの場合建物の上層にあることが一応その理由と考えられるが、主人公の場所の移動を上下動として明示することによって、作品はことさらそれを強調しているようにみえる。また、教会や劇場のような住宅以外の建物でも主人公は内部を昇り降りし、さらに部屋のなかでも、梯子や椅子に昇降したり、床に倒れたりする。そして、屋内での場所の移動は、屋外でのそれと組合わされることで、さらに効果が高められている。主人公は、たびたび、山や、崖や岩の上に登る。乗馬と落馬が繰り返されることもある。主人公は出世という上昇願望に憑かれた存在だが、同時に絶えず下降することを強いられている。上昇－下降の反復が作品の命ずる彼の運命である。

他の人物としては、主人公の先駆者として、同じように上昇－下降したダントン、ナポレオン、ボニファス・ド・ラ・モールなどがまずあげられる。さらに、主人公の二人の恋人、レナール夫人とマチルドは、前者は上昇、後者は下降によってそれぞれ特徴づけられている。

事物としては、レナールの製釘工場の鉄槌、ソレルの製材所の鋸が、上昇－下降するものの代表としてあげられるが、もっぱら下降・落下・転倒するもののほうが多い。水、書物、花瓶、鉢、ハサミ、髪などである。

上昇－下降のテーマは、主人公の運命が急変したり、主人公が危機に陥ったりするとき、特に集中的に現れる。第一部では、レナール夫人の手を握る場面から、ナポレオンの肖像事件をへてフーケ訪問にいたるあたり、第二部では、マチルドの部屋に庭から梯子で忍び込む前後である。そして、犯行、入獄、裁判、刑死、埋葬と続く結末では、最も激しく劇的にテーマは展開され、作品のフィナーレを飾っている。

さて、このように執拗に反復される上昇－下降のテーマの根源にあるのは、いったい何だろうか。様々なことが考えられるだろうが、ここでは、キリスト教、特に、旧約新約両聖書との関連に目を向けてみたい（以下第6回へ）。

有名な『バルムの僧院』の冒頭の幸福感は、「個」と「全体」という視点から見ると、あきらかに「全体」の幸福に属している。ミラノ全体、さらにはイタリア全体が幸福の歓喜に包まれるのであって、ここに「個」の幸福という問題は介入してこない。通常「個」の問題として、すなわち牢獄のように閉ざされた、極めて個人的・非日常的空間に局限されて語られる幸福感が、ここでは例外的に「脱個人化」していると言ってもいいだろう。この幸福の歓喜に包まれるミラノが描かれるのは、「個」としてその幸福の感情を引き受ける場、すなわち主人公の不在の時、すなわちその生誕以前であることには大きな意味がある。この冒頭の重要性のひとつは、一つの感覚的生が、収斂していくべき「個」を持たずに、この小説に頻出する《peuple》という全体性の中に融解していることである（平民の主人公が《peuple》のエネルギーを崇高なまでに体現するのに、民衆そのものはその背後に隠れて出てくることの少ない『赤と黒』とよい対照をなしている）。

こうした「個」の揮発を感じさせるエクリチュールは、主人公ファブリスの登場によって消えてしまうわけではない。この小説のなかでは、「知識」に対して「無知」を、「反省」に対して「迷信」を、さらに「推論」に対しては「予言」を、といったふうに、近代的な「個」（自我）を形成しているはずのものが、その対立的要素によってことごとく希薄化させられている。共和制に立つ自由主義を信奉しながら、その卑俗さを嫌悪し、結局は全く社会から隔絶されて生きるしかない変人として、いわば社会全体から去勢された貴族青年としてその内的実在を描かれるオクターヴと比較しても、ファブリスという存在は極めて異質な印象を読者に与えるだろう。ほとんどのスタンダード的人物は「汝自身を知れ」を格率として、自己を追求する人間、換言すれば持て余すほどのあふれるような自己をその内なる中心に持っているものたちであるのに対し、ファブリスは、他者への同一化を始めから運命づけられているかのような役割を充てられているのである。

その意味で『僧院』に数多く見られる同一化の遊戯とでも呼べる場面は重要である。ロマン主義的に神話化された内的アイデンティティなるものを真っ向から否定するかのようなファブリスの存在は、他者の名前、身分証明、衣服を受肉しながら、アイデンティティというものが本来内在的なものによって成り立っているというよりもむしろ、名前や表情（顔付き）や職業といった他者の目に明らかなものによって支えられていることを証しているようにさえ見える。人間がつねに人間対人間の、いわば間主観性の牢獄の中で生きなければならない以上、こうした可視性（外面性）はある意味で内面的なもの以上にアイデンティティと密接な関係を持っているのは言うまでもない。『僧院』の主人公がこの可視性（外面性）のうえを節度なく浮遊するのは、強烈な個性を内在させるのではなく、内面を空洞化された人間を創造する、ほとんど無意識的な要請があったからだとも考えられる。多くの主人公たちは「私は何者か」を問う。しかし、その問いを発する以前に「私は彼である」「私はあなたである」と言ってしまうある種の神経症患者さながらに、『僧院』の主人公はつぎつぎと「他者」のうえをさまようのである。「私」を離れて幸福を感じることはできないが、「私」の幸福は書くことができない。このパラドキシカルな関係を身にしみ感じていたのが他ならぬスタンダード自身であったとすれば、この小説の前半部の雰囲気を作っている「個」の希薄化は、彼にとって幸福を描くもう一つの方法であったはずなのである。

ジュリアン・ソレルの中にイエスを見ることは、すでにH.-F. IMBERTによって行われており ("LES METAMORPHOSES DE LA LIBERTE", JOSE CORTI, 1967, p. 580~582)、また、聖家族の精神分析的な解釈にもとづいて、ジュリアンとレナール夫人の関係を読み解くこともなされている (PHILIPPE BERTHIER: "STENDHAL ET LA SAINTE FAMILLE", DROZ, 1983, etc.)。さらに、スタンダールとジャンсениスムとの関係は上記IMBERTによって ("STENDHAL ET LA TENTATION JANSENISTE", DROZ, 1970)、スタンダールとキリスト教との関係はF. M. ALBERESによって ("STENDHAL ET LE SENTIMENT RELIGIEUX", NIZET, 1956) なされている。しかし、聖書のテキストそのものと『赤と黒』との関連を詳しく追及したものは存在しないようである (ALAIN CHANTREAUの "LE SYMBOLISME RELIGIEUX DANS LE ROUGE ET LE NOIR", dans LE SYMBOLISME STENDHALIEN, ACL, 1986が手をつけているが、詳しくない)。

本発表のテーマからは、次のような聖書の言葉が最も重要なものとして浮かび上がる。『誰でも自らを高くする者は低くされ、自らを低くする者は高くされるであろう』 (マタイによる福音書、23章12節)。そして、『赤と黒』の主人公の上昇と下降に満ちた生涯は、このイエスの教説に対する反抗と帰依の微妙な複合としてあらわれてくる。同じように『大工の息子』として生まれ、同じように金曜日に死刑判決を受け、そして死の恐怖を苦しんで死ぬ物語りの大枠に目を向ければ、作者がイエスの物語りにジュリアンのそれを重ねようとしたことは明らかである。イエスの生涯は微妙に換れた形で主人公の生涯に映し出される。例えば、山の頂き近くにある洞窟で野心の夢に耽る主人公の姿には、荒野で悪魔の誘惑を退けるイエスの像が逆倒して映っているし、たとえ『ソロモン王の政府』でも権力者に仕えるようなことは止めろと言う友人を馬鹿にしてパリに出る主人公の行為には、『栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった』 (マタイ、6の28、29) という、イエスの言葉が反響している。野心家であったことを死ぬまで後悔せず、『傲慢(orgeuil)』という最もキリスト教的徳から遠い性格を持たされ、父なる神に対抗し、もう一人の『傲慢の悪魔』マチルドを征服する主人公は、最も反イエス的な存在だが、富と偽善の支配を憎み、『感じやすい心』を持ち、野心を捨てた後は『その日その日』を生きているというところでは、作者はかぎりなくイエスの教説に身を寄せている。また、ジュリアンは獄中で、使徒パウロまで否定し、反聖職者主義者として徹底した姿をみせるが、『公明正大で、善良で、無限』の神の存在は否定しない。しかし、一方、ジュリアンの『ローマ人的精神力(vertu)』は、時にその不足が指摘されても、決して貶められることはなく、『傲慢』さも、揶揄されることはあっても、決して非難されることはないから、作者は、護教的にイエスの教説とキリスト教のドグマに近づいているわけではない。旧約の神とそれに修正を加えたキリスト教のイエスおよびマリア像に対して、作者は独特な位置をとっており、あるところでは、ニーチェの『アンチ・クリスト』の先駆のように見えるかと思うと、あるところでは、新約の独自の解釈にもとづいて、イエスの像に主人公の像を限りなく近づける。幼年時から親しんだ聖書とキリスト教のドグマは、想像以上に作者の無意識に食い入っていると思える。